

## プロローグ

# 「今の延長なのか、それとも…」

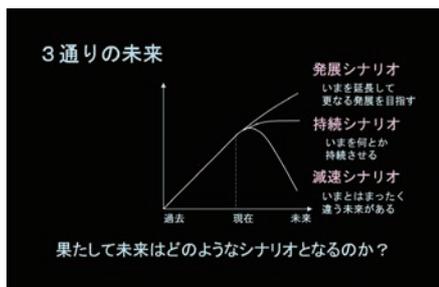
東京大学名誉教授  
原島 博



## ■未来を予測する3つのシナリオ

このシンポジウムのコーディネーターを務めております原島です。まずは花王芸術・科学財団設立30周年、おめでとうございます。普通、今回のような30周年の記念シンポジウムでは、この30年間を振り返る内容のものになることが多いのですが、今日は過去を振り返るのではなく、あえて「未来」というタイトルにさせていただきました。それも、「明るい未来」のような形容詞もつかず、単に「未来」の二文字です。というのも、もしタイトルを「明るい未来」としたら、みなさんは結構しらけるのではないのでしょうか。みなさんは、未来はそう簡単ではないという気持ちをお持ちだと思うからです。そのため、あえて形容詞をつけませんでした。これは言い換えると、未来がどうなるのかはわからない。それを実現するのはやはり自分たちなのだということでもあります。単に未来を予測するのではなく、自分事として未来を考えていこうということです。そのような意味も込めて、シンポジウムの副題は「わたしたちにできること」となっています。未来はわからないものだけれど、単にわからないだけで終わらせるのではなく、何ができるかを考えるきっかけにしたいと考えております。

そこでプロローグとして、まずはわたしから「今の延長なのか、それとも…」というタイトルで問題提起をさせていただきます。「今の延長なのか、それとも…」というタイトルをつけたのは、未来については3つのシナリオが考えられるからです。たとえば横軸の左端を過去、右端を未来として成長曲線を描いたグ



ラフを考えた場合、過去から現在までは右肩上がりの時代でした。そこでまず考えられるのが、右肩上がりの状態がそのまま続き、現在の延長としてさらなる発展を目指すという「発展シナリオ」です。わたしの専門である科学技術の分野では、まだまだこれから科学技術が発展をもたらし、2045年には人工知能が人間を超える「シンギュラリティ（技術的特異点）」が起こるという話もあります。

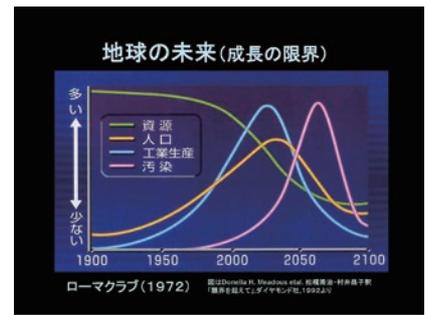
2つ目が、今の状態がそのまま続くという「持続シナリオ」です。今をなんとか持続させようという「SDGs（持続可能な開発目標）」は、まさにこの持続シナリオですね。そして3つ目が、曲線が右肩下がりになる「減速シナリオ」。これは成長が落ちるというよりは、未来には今までとはまったく違った時代が来るというシナリオです。減速シナリオと聞くと、未来はないとか、あるいはディストピア（反ユートピア）のようなものを想像するかもしれませんが、しかしグラフの見方を変えて、縦軸を地球温暖化と考えれば、右肩下がり減速シナリオは素晴らしいことになるわけです。減速シナリオで重要なのは、今までとは違った未来が来るかもしれないということです。

実際、このことを示唆するようなデータが最近いくつか出ています。たとえば国土交通省が発表している「日本の長期人口推移と予測」というグラフ。西暦800年から始まるこのグラフでは、鎌倉・室町・江戸の各幕府の成立を経て江戸時代中期までは人口が増え続け、江戸時代中期からは定常的な状態になり、明治に入ると人口が急激に増えています。ところが、21世紀後半にはその人口が半分になると予想しています。わたしはこのグラフを見たときに驚いたのですが、人口の予測は比較的当たるものです。おそらく、そのような状態になったときには、明らかに今と違う時代が来るでしょう。もちろん、そうならないようにすることも重要ですが、同時に、そのような時代が来たときにどうするかということも考えなくてははいけません。



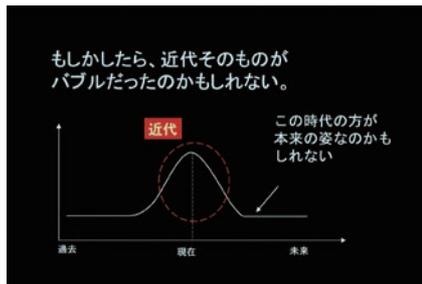
## ■未来を見据えてこれからをデザインする

先の人口予測は日本の未来についてのグラフですが、地球の未来に関しては、世界的に有名なシンクタンクのローマクラブがMITに委託した研究の結果発表された、1972年の「成長の限界」という有名なグラフがあります。これは「資源」「人口」「工業生産」「汚染」の4項目について、



1900年から2100年までの成長曲線をコンピュータでシミュレーションしたもので、20世紀と21世紀はまったく違った時代になるということを示しています。20世紀は基本的に右肩上がりで、21世紀はそうではないことが、グラフからわかります。ここで重要なのは、このグラフは予言や予測ではなく、「何もしないとこのようなことになるから対策を考えよう」ということを論じているものです。しかし残念ながら、まだきちんとした対策を取れていないような気がいたします。

このグラフでは工業生産の成長曲線は水色の線で表されていて、2025年頃から、まさに減速シナリオを描いています。そこで思うのは、200年間しか示されていないこのグラフに、1900年以前と2100年以後を外挿したらどうなるのかということです。1900年以前は、工業生産はおそらく0が続いているでしょう。それが20世紀になると急に高くなり、21世紀には下がり始め、2100年ではかなり低いところにあります。そして、その先を外挿した場合、ずっと低いままで推移するかもしれません。そうしたグラフをもし500年後、1000年後の歴史家が見たらどう思うのでしょうか。成長曲線の一部だけが異常に高い20世紀や21世紀という、とんでもない時代があったということになります。20世紀や21世紀は時代区分でいうと近代ですが、近代とは、地球に蓄えられた資源を使い尽くして成り立ったバブルの時代だったと思うかもしれません。そして、もし近代がバブルであったとするならば、近代のほうが特別な時代で、その先の落ち込んだように見える時代のほうが、長い歴史で見れば本来の姿だと思うかもしれません。



そこで重要になるのが、未来を見据えて準備することです。つまり、これからの21世紀後



半は日本の人口が減っていくわけですが、未来を予測するとき、その右肩下がり時代を単に過去の延長として対策するのではなく、むしろその後に来る時代のほうが本当の時代だという形で未来を見据えて、そこへどう移行するかをデザインすることです。そう考えると、21世紀後半となるこれからの数十年は未来への準備の時間になります。このように、未来を見据え、つまり未来を起点にして現在を振り返り、これからを考えることを「バックキャスト」といいますが、わたしたちはこれからバック

キャストの時代に入ろうとしているのではないかという気がいたします。その立場から、気になっている言葉がありますので、それを紹介して終わりたいと思います。

それは「Do it Ourselves (DIO)」です。みなさんは「Do it Yourself (DIY、自分で)」という言葉をご存じだと思いますが、「DIO」は「自分たちで」ということです。この「it」にはいろいろな意味を当てはめることができます。「it」を「未来をデザインすること」とすると、「未来のデザインを自分たちでやろう」という意味になります。未来を自分たちの問題として、わたしたちにできることを考えようということです。

もしかしたら、未来は自分とは関係ないと思っている方もおられるかもしれません。たとえばわたしは、自分自身に直接関係する未来はあと5年か10年です。それほど未来はありません。しかし、わたしはこの年になって5月に初めての孫が生まれました。その孫は22世紀まで生きる可能性があります。そうであるならば、未来は素晴らしいものになってほしい。「未来に希望はない」などと言ってしまったら、子や孫たちに申し訳が立ちません。ですから、次の時代を担う子や孫の世代のために、今のわたしたちには何ができるのかを、これからみなさんと一緒に考えていきたいと思っております。

今日は姜尚中先生、落合陽一先生、渡邊あゆみさんといった、素晴らしい方々にいらしていただいております。わたしがそこに小さく寄り添うような形で進めたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。



撮影：中村 年孝

コーディネーター  
原島 博（東京大学名誉教授）  
1945年終戦の年に東京で生まれる。2009年3月に東京大学を定年退職。東京大学では、工学部および大学院情報学環に属して、人と人とのコミュニケーションを、リアルとバーチャルの両側面から技術的にサポートすることに関心をもってきた。その一つとして、人の顔にも興味をもち、1995年に「日本顔学会」を発起人代表として設立、「顔学」の構築と体系化に尽力してきた。科学と文化・芸術の融合にも関心をもち、文化庁メディア芸術祭審査委員長・アート部門審査員、グッドデザイン賞（Gマーク）審査員なども務めた。現在は東京大学名誉教授、2015年12月より再び特任教授として東京大学に戻り、全学共通の文系・理系を横断した大学院教養講義を担当している。公益財団法人 花王芸術・科学財団 評議員。